

タイ国での現地理解教育の実践

—— 現地校の訪問と交流授業を通して ——

前シラチャ日本人学校 教諭

大分県大分市立豊府小学校 教諭 姫 嶋 公 彦

キーワード：現地理解・学校訪問・交流授業

1. はじめに

シラチャ日本人学校は、平成21年に開校した‘世界で一番新しい日本人学校’である。私が赴任した開校3年目からは、校長先生とディレクターの企画・立案により、校外宿泊研修が実施された。研修内容は、タイの東北部、北部などに行き、現地校の子どもたちと交流授業を行うことが中心である。タイの文化に触れる体験や歴史を学ぶ見学等もある。そのおかげで、私はタイ国への思いを強くし、現地理解を図ることができた。

今回は、3年間の現地校への訪問「交流授業」を振り返り、成果と課題をまとめることで、現地理解教育の在り方を探っていききたい。

2. 現地校訪問 I [交流授業 I]

(1) 訪問校について

タイの東北部に位置するサムットソクラーム県にあるワットチョンロン学校は、全校児童が80名程の学校である。私たちは、小学校3・4年生の児童を対象に交流授業を実践した。

(2) 交流授業のねらい

- 身の回りあるものを使い、実験を通して科学の目を育てる。
- 互いに言葉が通じない中で、お互いに意思疎通をしようとする態度をもたせる。

(3) 授業略案

学習活動	留意点など
1. シャボン玉で遊ぼう	○シャボン液を工夫し、ハンガー、フラフープ等で大きなシャボン玉をつくる。
2. ペットボトル空気砲をつくろう	○切り取ったペットボトルに風船をかぶせ、空気砲をつくる
3. 空気砲で、的当てゲームをしよう	○簡単な的（紙やろうそくの火）を用意し、ゲームを通して、空気の力を感じさせる。

(4) 授業の実際

シャボン玉遊びでは、ネットやうちわなどの道具を提示したり、実際にシャボン玉をつくることで、子どもの意欲を引き出すことができた。シャボン玉を初めて体験した子どもたちは、夢中になって楽しんでいた。ペットボトル空気砲は、空気砲をつくるまでに予想以上に時間がかかり、遊ぶ活動が十分に保証できなかった。



シャボン玉遊びをする子どもたち

(5) 成果と課題

◇タイの子どもたちが体験したことのない教材（素材）を提示することで、意欲をもって活動できる。

◆道具の準備や片付け等、子どもの実態に応じてサポートできるよう、計画を立てる必要があった。

◆学校内の活動場所や時間配分など、事前の連絡等を行い、無理のない授業展開が求められる。

3. 現地校訪問Ⅱ [交流授業Ⅱ]

(1) 訪問校について

訪問校のワットポーティヤーン校は、幼稚園児から小学6年生まで約150名の学校である。家庭環境や経済的な問題等で、100名近い子どもが学校で寝泊まりをしている。「家族と暮らすこと」や「学校で学ぶこと」が当たり前の日本では考えられないことだ。子どもたちは、どんな様子で過ごしているのだろう…。そんな心配は、子どもたちの出会いとともに吹き飛んだ。元気いっぱいの子もたちは、「学びたい」と目を輝かせ、私たちを笑顔で迎えてくれた。

(2) 交流授業のねらい

昔から伝わる日本の玩具‘びゅんびゅんごま’を色や形を工夫して作ったり、遊んだりする体験を通して、楽しむことができる。

(3) 授業略案

学習活動	留意点など
1. びゅんびゅんごまを体験する (広い教室(会議室ぐらい))	○自己紹介の中で、教師が実演しながら、4種類のびゅんびゅんごまを提示し、数名の子どもに体験させた後、材料を提示し、自分たちで作ってみたいかと投げかける。
色や形を工夫して、きれいに回るびゅんびゅんごまが作れるかな	
2. びゅんびゅんごまを作る	○「①型づくり」「②色ぬり」「③糸通し」の作る過程でコーナーを分け、担当教諭を一人ずつ配置する。
3. びゅんびゅんごままで遊ぶ	○完成したびゅんびゅんごまを、自由に遊ばせる。 「よく回っているね」「きれいだね」「上手だね」「もっと速く(遅く)してごらん」などのタイ語で支援する。
4. 巨大びゅんびゅんごまを回す	○ダンパネで作った巨大びゅんびゅんごまを提示し、みんなで回してみないかと投げかけ、挑戦させる。

(4) 授業の実際

子どもたちは「やってみたい」と笑顔を見せた。①色をぬる ②ひもを通す ③回して遊ぶ の工程は、時間差こそあれ、すべての子どもたちが自分の力で言うことができた。最初は回せなかった子どもも、私たちが手を持ってタイミングを教えたり、上手な友達の回し方を観察したりしながら回せるようになっていった。その後、大きな‘ブンブンごま’を提示すると、子どもたちは驚きながらも、「回してみたい」と集まってきた。‘ブンブンごま’に熱中する姿や自分で作ったブンブンごまを大事に抱える子どもたちの姿を見て、‘準備してよかった’と嬉しい気持ちになった。



ブンブンごまを回す子どもたち

(5) 成果と課題

◇見通しをもって道具や場を準備することによって、子ども自身の力で作り進めることができた。

◇一人ひとりのおみやげとなる教材（素材）を持ち込むことで、子どもは大きな達成感を味わえる。

◆時間設定や役割分担が不明瞭で色塗りの支援ができず、子どもたちに色変わりの面白さまでは感じさせられなかった。

◆ぶんぶんごまを教えるための単語だけでなく、指示や指導に関するタイ語も研修すべきだった。

4. 現地校訪問Ⅲ [交流授業Ⅲ]

(1) 訪問校について

3年目の訪問校は、シラチャ日本人学校と同じチョンブリ県内にあるナーパーマノーロット校であった。

今回は、交流授業の前に授業参観を設定することで、学校の様子や子どもの実態をつかむことにつながった。子どもたちは礼儀正しくあいさつができ、授業中も先生の話を中心に聴いている姿があり、本当に感心した。タイの子どもたちの学ぶ姿勢に見習うべきものがあるだろう。

(2) 交流授業のねらい

身近な道具を使ってできるおもちゃ「空飛ぶ円盤」を色や模様を考えながら作り、遊び方を工夫して楽しむことができる。

(3) 授業略案

学習活動	留意点など
1. 空飛ぶ円盤を体験する	○教師が4, 5種類の空飛ぶ円盤を提示し、数名の子どもに体験させた後、材料を提示し、自分たちで作ってみたいかと投げかける。
自分だけの「空飛ぶ円盤」を作って、みんなでたのしくあそぼう	
2. 空飛ぶ円盤を作る (広めの教室)	○「①色ぬり」「②飾りつけ」「③発射台」の作る過程でスペースを分け、担当教諭を一人ずつ配置する
3. 空飛ぶ円盤で遊ぶ (広場&グラウンド)	○完成した空飛ぶ円盤で自由に遊ばせる。遊び場として3つのコーナーを設置する。 ・距離を競わせながら遠くへ飛ばすことを楽しむ。 ・高い点数を取ることを目標にゲームを楽しむ。 ・的当てゲームで、ねらった的に当てることを楽しむ。 ※「すごいね」「やったね」「おいしいね」「もう1回」等のタイ語でゲームを盛り上げる。

(4) 授業の実際

子どもたちは、夢中になって空飛ぶ円盤を作り始めた。①色塗り②飾り付けでは、一人ひとりの作業を手伝ったりアドバイスをしたりすることで、根気強く取り組む姿が見られた。遊び場でも、3つのコーナーを設置したことで、どの子にも遊ぶ楽しさを味わわせることができた。最後に、空飛ぶ円盤をプレゼントすると伝えた時の笑顔は忘れられない。



空飛ぶ円盤に色を塗る子どもたち

(5) 成果と課題

- ◇子どもに任せる活動や教師が重点的に指導する部分を分けることで、スムーズな授業展開ができた。
- ◇絵とタイ語で作り方を説明することで、子どもたちは見通しをもって作業に取り組むことができた。
- ◇遊び場では、評価の言葉をタイ語やジェスチャーで伝えることで、子どもたちの笑顔が広がった。

5. まとめ

3回の現地校訪問「交流授業」を通して、現地理解教育を進めていく上で大切なことが見えてきた。一つ目は、子どもたちの母語（タイ語）をできる限り習得するとともに、実演や具体物を提示しながら笑顔でコミュニケーションを図ろうとする姿勢である。もう一つは、子どもたちが夢中になり自ら学び進める（作り進める）ことのできる素材を教材にすることである。教材は、日本の文化・遊びを軸にして検討していくことが望ましい。お互いが笑顔になった時に初めて、現地理解教育の新たな一歩を踏み出すことができる。